

古史伝 (十二卷)

平田篤胤著。文政八年(一八二五年)。

いわゆる天の岩戸に籠もつた天照大神が戸を開けて出る
場面で、「古史伝」では本文で「稍自^レ戸出而臨坐之時。其
隱立之手力男神。引^ニ開其石戸^一。取^ニ其御手^一而。奉^ニ引出
一矣。」と記し、これに次のように註している。小字は割
注。

○引^キニ開^ケ其ノ石戸^ヲ一は。本に此文なし。今ハ書紀、古語拾遺共
に、天ノ手力雄ノ神、侍^ヒニ磐戸ノ側^ニ一、則引^キ開^シ之者^{カバ}とあるに依て補
へり、必有べき文なり、かの細^メニ開^ケ給へりし石戸を。皆がら
引^キ開たる由なり。しか爲むとてなも。御戸掖に隠^リ立しける。
世に此ノ時石戸を引開^ラき、其戸を投給へるが、信濃ノ囿に落て山と化^ナ
れる、それ戸隱山なりと言傳ふるは、美濃ノ囿ノ喪山などの故事を思
ふに、然も有べくおぼえたり、春日ノ社記に、天ノ手力雄命ノ神ハ、信
濃ノ囿戸隱明神是也、と有は、傳^ヘある事にや、また信濃ノ囿地名考に
も、古説を引て戸隱ノ神社は、手力雄男ノ神なる由云り、さて戸隱は、

トガクリと訓べきを、訛りて、トガクシと言ひならへるにや、

註 新日本古典籍総合データベース「1 古史傳」国文
研、ヤ5ー40ー1く15、刊、大、15冊、五之
卷欠、200000393」の画像データ（DOI
10.20730/200000393）777 ㊦。

なお、「平田篤胤全集 第二卷」104頁に翻刻あり。